

山地民パラウンの越境と仏教実践の独自性 ——ミャンマー・シャン州ナムサン周辺地域の事例から——

小 島 敬 裕*

The Migration of Palaung Buddhists and the Uniqueness of Their Religious Practices: A Case Study from Namhsan, Northern Shan State, Myanmar

KOJIMA Takahiro*

Abstract

This paper will explore the relationship between the migration of Palaung Buddhists and the construction of their own practices in Namhsan, northern Shan State, Myanmar. The Palaung are uplanders of this area, while the Shan are rulers of the valleys. Previous studies concluded that the Palaung simply imitated Shan Buddhist practices, citing how the Palaung would typically deliver teachings in the Shan language and use texts written in the Shan script. However, conducting fieldwork in Namhsan, I found that the Palaung have recently begun to translate Buddhist texts using the Palaung script and to deliver dharma teachings in the Palaung language. One factor of this phenomenon is that the social contacts between Burmese and Palaung people have become more intense, on account of the increasing of migration. As a result, influence from Burmese Buddhism has become stronger. Yet elite monks try to make their own style of practice and create a “Palaung sect.” These developments demonstrate how the Palaung have exercised their own cultural agency and remade the ethnic connectedness in the articulation of Buddhist practices. Nonetheless we must exercise caution in assessing the reality of the “Palaung sect.” Owing to the great differences in language among the Palaung sub-groups, the Buddhist texts composed in Samlon language are difficult to understand for other sub-groups. Therefore, there is great diversity in the Palaung texts of each sub-group. This means that these sub-groups of Palaung still maintain a micro-regional community by remaking and reinforcing connectedness within the groups.

Keywords: Theravada Buddhism, religious practice, Myanmar, Palaung, Shan, Burmese, interethnic relationships, highland people

キーワード：上座仏教，宗教実践，ミャンマー，パラウン族，シャン族，ビルマ族，
民族間関係，山地民

* 京都大学東南アジア研究所・日本学術振興会特別研究員 (PD) : JSPS Research Fellow, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
e-mail: kojima@cseas.kyoto-u.ac.jp

I はじめに

本論文では、ミャンマー連邦共和国シャン州北部ナムサン周辺地域における山地民パラウン (B: Palaung) を事例とし、盆地のシャン族、平地のビルマ族との民族境界を越境する人やモノがもたらす仏教実践の動態と、その独自性を明らかにする。¹⁾

ナムサンは、シャン州北部の山地に位置する町で、人口の大部分をパラウン族が占めている (図 1)。パラウンとはビルマ族による他称であり、自称はタアーン (Tă'an) である。²⁾ 主に山地に居住しており、本稿で扱うナムサンの町の中心部は、標高約 1,600 メートルに位置している (写真 1)。彼らの母語とするパラウン語は、モン・クメール系言語に属するが、本論で詳述するようにパラウンには複数言語の話者が多い。

パラウンとの関係を取り上げる民族の一つは、シャン (B: Shan) として知られる人々である。これもビルマ族による他称であり、タイ (S: Tǎi) と自称する。主に山間部の盆地に居住しており、ナムサンに近いチャウツマーの町は標高 700～800 メートル、ティーボーは約 400 メートルである。シャン語はタイ系言語であり、パラウン語と異なる言語系統に属しているため、一定の習得期間を経なければシャン族がパラウン語を理解することはできない。

またミャンマーの最大民族ビルマ族との関係も取り上げるが、彼らの自称はバマー (B: Bama) で、主にミャンマー中央部の平地に住んでいる。ビルマ語は、ミャンマーの国語として位置づけられているが、チベット＝ビルマ系の言語であり、パラウン語、シャン語と語順も大きく異なる。

中国雲南省徳宏州でタイ族の上座仏教に関する調査を行っていた筆者が、パラウンの上座仏教に関心を持ったのは、長期定着調査を行ったタイ族農村の寺院に、ミャンマー側ナンカン郡出身のパラウン族女性修行者が居住していたためである。そこでの調査を契機として、国境・民族の境界を越えた、宗教実践を媒介とする仏教徒たちの関係についての研究を志すようになった [小島 2014a]。まず中国の先行研究を調べると、「徳昂 (筆者注：中国側のパラウン) 族の宗教信仰は傣 (筆者注：中国側のシャン) 族と同様である」 [王 2007: 456] といった記述が目立つ。また「徳昂族は、民族の言語を表す文字を持たず、長らく傣族の文字を使用してきた。彼らと傣族はともに小乗仏教 (筆者注：上座仏教) を信仰し、寺院内では傣文字の経典を用いる。徳昂族の見習僧も傣文字を学び、傣文字の経典を読み、徳昂族の男子の一部は、小さ

1) ナムサンは、ビルマ語風に発音すればナンサン (B: Nanhsan) であるが、日本語表記の慣例に従い、本稿では「ナムサン」と表記する。

2) 本稿では、民族名を記載する場合、ミャンマー国内の居住者に関してはパラウン、シャン、ビルマを使用する。中国国内の居住者に関しては、タアーン、タイ、ビルマを使用する。各言語を引用する場合、無表記はパラウン語、S はシャン語、B はビルマ語であることを示す。地名に関しては、ビルマ語表記を優先し、必要に応じて民族語表記を付す。



図1 ナムサンの位置

出所：グーグルマップをもとに筆者作成

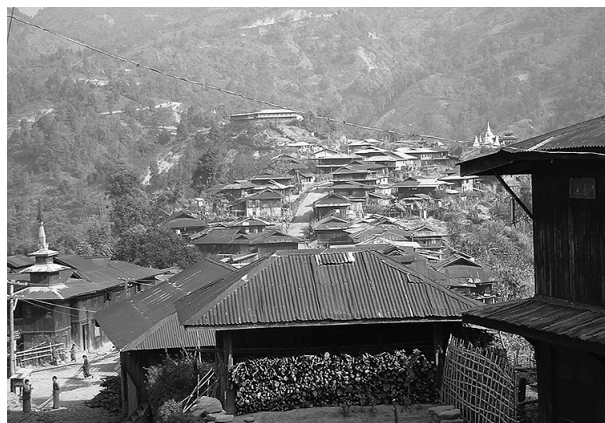


写真1 山の尾根上に位置するナムサンのバラウン村落

い頃から寺で見習僧になり、傣文字を学ぶ。そのため、彼らの知識人（僧侶や見習僧となって還俗した人）は、数百年来、誦経、民間の記録、書信の往来などにはすべて傣文字を用いた」[桑 1999: 41–42] というように、タイ族の実践の強い影響下にあったことが示唆されている。

ところが、タイ族村落における長期定着調査の後、2009年から2011年にかけてミャンマー・中国国境でルーマーイ（Rumai）と呼ばれるサブ・グループ（クルー *khru*）の調査を行った際に、在家の儀礼専門家がパラウン文字で仏典を書き、パラウン語で説法していることに気づく [Kojima and Badenoch 2013]。さらに聴き取りを行うと、パラウン文字やパラウン仏典の発祥地はシャン州ナムサンだと説明されたのである。そこで筆者は、2011年よりナムサンおよび周辺地域の調査を行うことにした。

ミャンマー側の先行研究としては、イギリス植民地時代の1910年代にナムサンでサームロン（S: Sam-*lon*, Kātur）と呼ばれるサブ・グループの調査を行ったミルンの民族誌が今もって代表的である。そこには、パラウン仏教徒の布薩日（持戒して過ごすことが理想とされる新月、上弦8日、満月、下弦8日）の過ごし方について以下のような記述が見られる。

午前中は、僧侶による説法を聴く。布薩日の午後には、休憩所において、識字者がシャン語またはビルマ語で大きな声でジャータカを朗誦する。聴く者もいるが、中には寝る者もいる。他の者は仏教徒としての生活について語り合ったり、死んだ友人の魂がどこを漂っているかについて語り合う。夕方には全員が参拝のため本堂に戻り、より敬虔な者は、仏像の前に再び供物を置く。夜には休憩所で就寝し、翌朝には再び仏前に供物を奉納した後、帰宅し、日常の仕事に戻る。[Milne 2004 [1924]: 319]

またパラウンは、独自の文字を持たず、王統記もシャン語で書かれていたとする [ibid.: 18]。

次に、パラウン知識人のウー・ポーサン（U Paw San）は、植民地時代から1948年の独立直後、祈祷の際にはシャン語が使用されていたと言う。その理由について、パラウン語は「低レベルの言語」と認識されていたため、祈祷に用いると軽蔑され、シャン語で祈祷したほうがより効果的で、聴き心地もよいとパラウンの人々は感じていたためだと説明する。そして、この感情を生んだ背景には、パラウンの首長や僧侶たちが自民族の利益を考えず、シャン文化を「高レベル」とみなす一方で、自らの文化を「低レベル」とみなした風潮があると指摘する [Paw San 1997: 138–141]。

ところが、筆者がナムサンで調査を実施すると、町の中心部では1990年代以降に廃れつつあるものの、周辺の農村部においては、在家の仏典朗誦専門家ター・チャレー（*ta cã re*）が、パラウン語の韻文形式で書かれた仏典（*bẽ thãm/lik tham/thãm phra*）を朗誦する実践が現在でも見られることがわかった（写真2）。またナムサンでは儀礼の際にシャン語で礼拝が行われる



写真2 パラウン語の仏典を朗誦するター・チャレー

ことはほとんどなく、ビルマ語やパラウン語が使用されている。

そこで本研究では、パラウン語・文字による仏典朗誦の実践がなぜ構築されたのか、またその新たな実践がどのように受容されているのか、という問題の考察を通じ、山地と盆地、さらに平地の民族境界を越える人の移動がもたらした仏教実践の動態を明らかにする。パラウンの仏教実践の中でも、礼拝や仏典朗誦の実践に用いられる言語に注目するのは、上座仏教徒社会の各地において用いられるパーリ語経典は均質であるものの、各民族や教派によって、筆記される文字や朗誦の際の発音が異なるためである。本研究ではこの相違に注目し、山地民・平地民の関係についての従来のモデルの再考を目指す。

パラウンとシャン、ビルマの関係を扱った研究者としては、人類学者のエドモンド・リーチが代表的である。東南アジアにおける山地民と平地民の社会組織を比較したリーチは、山地モデルと平地モデルの特徴を挙げて二項対立的な分類をする。すなわち平地民は、階層制の政治構造を持ち、生産性の高い水稻耕作を行い、非単系出自、仏教を信仰し、複数の言語はあまり使用されないことを特徴とする。これに対し山地民は、平等主義の統治、生産性の低い焼畑耕作、単系出自、精霊信仰、複数の言語が使用されるのが特徴である。こうした特徴を持ちながらも、経済的に成功した山地民が生活スタイルを変え、仏教徒になることによって文明化された平地民になる場合もあり、民族は本質的なものではなく、可変的であるとリーチは主張した [Leach 1960; リーチ 1995 [1954]]。

しかしパラウンは山地民でありながら仏教徒で、パルマーン (*pārmaṅ*, B: *sawbwa*) を首長とする階層制の政治構造を持っており、この分類に当てはまらない。そこでリーチは、パラウンを2つの類型の「例外」として扱っている。パラウンが山地民でありながら平地民的な特徴も持つ背景について、パラウンは山地民の中でも茶の栽培によって経済力があつたため、仏教を

取り入れ、シャンの政治モデルを模倣したのだとリーチは説明する [Leach 1960: 53]。

これに対し、平地民と山地民の關係に注目したジェームズ・スコットは、平地民と互惠的な關係を結びながら、時に敵対し、平地に抵抗する山地民に注目した。その中でパラウンについては、上座仏教に改宗することによって文明化に近づいたが、居住地の流動性や移動耕作といった「山地民らしさ」の特性をともなう限り、十分に文明化したとは平地民からみなされなかったとする [スコット 2013: 101-106]。

スコットは、パラウンの仏教受容の意図について明確には説明していないが、リーチと同様、山地民が仏教を受容することには、平地民を模倣し、「文明」化を目指す意図があったと指摘している。上述したように、パラウンの知識人ウー・ポーサン自身の著作からも、両者の主張はある程度裏付けられる。しかしリーチ、スコットともに、近代國家の成立以前を射程としており、近代國家による支配が開始された後の状況については明らかにされていない。本稿では、むしろ近代國家の成立以降のパラウンに焦点を当て、彼らが平地民と関わりながら、どのように自らの仏教実践を構築してきたのかという問題について明らかにする。

次に、ナムサンのパラウンに関する先行研究を紹介しておこう。

イギリス植民地時代の 19 世紀後半にシャン州で調査を行ったジョージ・スコットは、パラウンの宗教に関し、彼らが仏教とともに精霊を信仰する旨の簡単な報告をしている [Scott and Hardiman 1900: 490-491]。

その後、1910 年代に本格的な定着調査を行い、パラウンの文化全般に関する詳細な民族誌を著したのがミルンである [Milne 2004 [1924]]。またミルンは、上述したように、宗教実践に関しても貴重な記録を残している。

ネーウィン政権成立直後の 1962 年には、パラウン文化に関する概説書がビルマ語で出版されている [Min Naing 1962]。これは独立後の 1950 年代に行った調査に基づき、少数民族文化シリーズの 1 冊として考古局の役人が執筆したものである。この書物には、本論文でも触れるウー・ポーサンの文字の存在や、ヨン (Yön) 派についての基礎的な情報も含まれる。また 1969 年には、ナムサン郡公安行政委員会が、ナムサンの社会や文化に関する包括的な文書をまとめ、その中にもパラウン文字の詳細な成立過程が述べられている [Myonei Longyonyei hnin Okchokhmu Kawmati Namhsan 1969]。

しかし本研究で報告するように、これらの記録が出版されて以降、パラウンの宗教や社会には大きな変化が生じた。また近年では、パラウンの知識人や僧侶たちが、ビルマ語で自らの文化や宗教に関する書籍を出版している。特にパラウン文字の創出に大きな役割を果たしたウー・ポーサンによる自伝 [Paw San 1997]、パラウン仏教の発展に貢献したトゥーカ師が執筆した書物 [Thu Hka 2009]、ナムサン在住のパラウン僧トゥザータ師によるマングレー國家仏教大學への修士論文 [Thu Za Ta 2012] は、近年の重要な成果である。

本稿では、これらの文献にも依拠しつつ、まず民族エリートによるパラウン文字や仏典創出の過程について明らかにする。しかし先行研究では、変化の背景にある社会・経済的变化との関わりや、「パラウン化」現象の村落レベルでの実態について明らかにしていない。そこで本研究では、上記の課題について、フィールドワークで得られたデータも援用しながら分析する。

筆者は、2011年から15年にかけて、シャン州のナムサン郡を中心に、ナンマトゥー郡、チャウツメー郡、ターチャーレイッ郡、チャイントン郡、カロー郡、ヤンゴン、マンガレーにおいて、パラウンの出家者、在家者に対する聴き取りを断続的に行った（図2）。本稿で使用したデータは、おもにこの時の調査で得られたものである。

II-1 上座仏教の受容と教派

15

ニー (B: Theinni, S: Sən Wi) 北部やモーメイッ (B: Momeik, S: Məŋ Mīt) で仏教が受容されていたため、その頃からナムサン周辺のパラウンにも仏教に関する知識は普及していただろうと推測する [Milne 2004 [1924]: 312]。³⁾

ではなぜパラウンは山地民でありながらシャンから上座仏教を受容したのであるのか。その理由は、パラウンが伝統的に茶の栽培と販売によって生計をたてており [e.g. Milne 2004 [1924]; 生駒 2014], 茶の販売によって得られた利益でシャンから米や塩などの生活必需品を購入するといった日常的接触が頻繁に行われていた [cf. リーチ 1995 [1954]: 266] ためではないかと推測される (写真 3)。

またパラウンの知識人や僧侶に聴き取りを行うと、仏教の流入経緯について彼らは次のように説明する。まず現在のシャン州東部からテインニー経由でヨン派がナムサンに入った。ヨン派とは上座仏教の一派であり、北部タイからシャン州東部を中心とする広い地域でタイ系民族を中心に信仰を集めている。その後、1878年にナムサンの町に管長寺院 (B: Gaing kyok kyaung) が完成し、マンダレーで教理学習していたパラウン僧のトゥナンダ (Thunanda) 師を、ナムサンの首長がマンダレーから招請して以来、トゥダンマ (B: Thudanma) 派が流入したのだという (図 3)。それ以降、管長寺院はパラウンの首長と深い関係を維持し、1959年に最後の首長であるクンパンチン (Khun Păn Cīŋ, B: Hkun Pan Sein) が逮捕されるまで、住職は首長の教師役を務めていた。

筆者が調査を行った限りでも、トゥダンマ派の寺院は、ナムサンの中心部に近いサームロン・グループの村落に多く見られる。⁴⁾ これに対し、ヨン派の寺院はナムサン周辺の村落部に集中している。ヨン派は、1980年にヤンゴンで開催された全教派合同サンガ大会議で公認された9教派の中には含まれていないため、僧侶が携帯する僧籍登録証の教派欄には、多くの場合「トゥダンマ」と記載されている。しかし彼等にインタビューを行うと、ヨン派であることを自任する。つまりヨン派は、制度的には消滅したことになっているが、水面下で存続しているのである [cf. 小島 2009]。

両教派には、戒律の遵守など様々な実践上の相違が見られた。1962年に考古局が発行したミンナインの著作には、指の幅2本分ほど髪を伸ばしたばかりでなく、髭を生やし、戒律で禁じられた夕食をとる僧侶も存在する旨が記されている [Min Naing 1962: 39]。筆者の聴き取りによれば、ヨン派の出家者は、寺院が山奥に位置しており、移動の際に体力を消耗するため、やむをえず薬として夕食を摂ったのだと説明する。また全教派合同サンガ大会議の開催以降に

3) テインニーへのヨン派の普及時期に関しては諸説あるが、シャン人研究者サイカムモンは、北部タイから15世紀に到達したとする [Sai Kam Mong 2001]。

4) ただし、グンロット・グループのように、以前はヨン派だったが、現在ではトゥダンマ派に編入したグループも存在する。



写真3 パラウンの村落付近に植えられた茶の樹

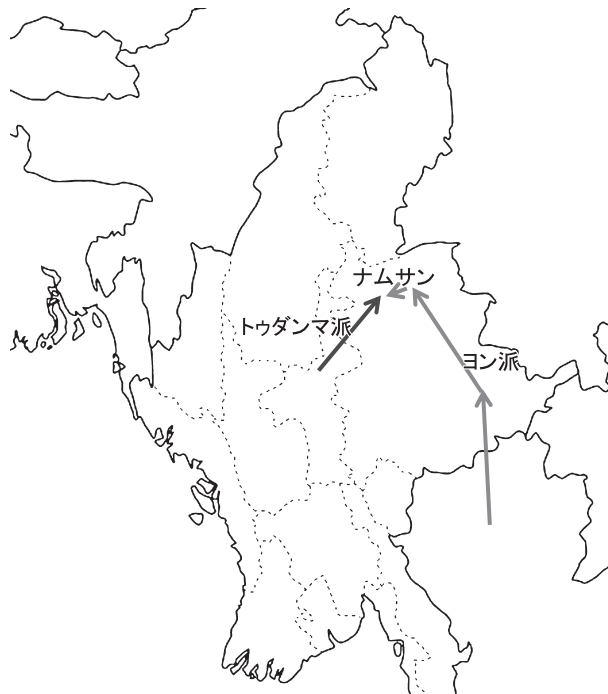


図3 ヨン派とトゥダンマ派のナムサンへの流入経路の概略



写真4 ヨン文字で書かれた仏典

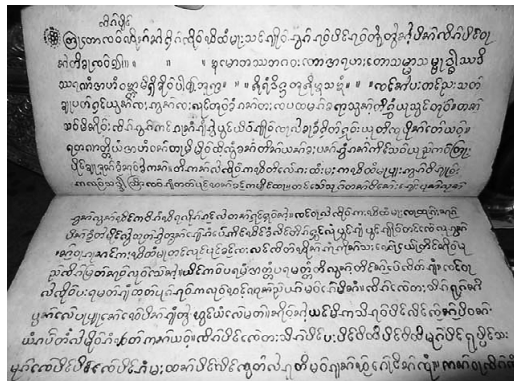


写真5 シャン文字で書かれた仏典（ただしパーリ語の部分はビルマ文字と共通）

成立したサンガ機構によって僧侶の戒律厳守が強調された1980年以前は、得度式参加僧が年齢を少しずつ差し出すという形にし、20歳未満でも比丘としての得度が可能になったと言う。現在では状況も変わりつつあるが、出家者の戒律に関する実践が、トゥダンマ派と比較して緩いとされるのがヨン派の特徴である。

次に異なるのは、仏教実践に用いられる文字である。それぞれの教派の寺院で調査を行うと、様々な文字で書かれた仏典を所蔵しているのに驚かされる。ヨン派の寺院に特徴的なのは、ヨン文字經典の存在であり、その他、シャン文字仏典も所蔵されている。周辺のシャン寺院で聴き取りを行うと、ヨン派の寺院でも現在はほとんどヨン文字が使用されていないが、パラウンのヨン派寺院ではヨン文字の仏典が現在に到るまで保存されているのが特徴である（写真4）。そのため、ヨン派の寺院では見習僧に対し、最初にヨン文字、寺によっては次にシャン文



写真6 ヨン派の寺院内で仏像に向って礼拝するパラウン女性

字を教育する。⁵⁾ ビルマ文字は小学校ですでに学習しているため、寺院内では教育していない。これに対し、トゥダンマ派の寺院では現在、ビルマ文字の仏典が最も多く、見習僧に対してもビルマ文字を用いてパーリ語の教育を行っている。ただし経庫内には、以前使用していたというシャン文字の仏典も見られ、1980年代以前はシャン文字とビルマ文字を教育していたという(写真5)。

寺院内で仏像を礼拝する際の言語も大きく異なる。ヨン派はタイ系のヨン式、トゥダンマ派はビルマ式で発音され、パーリ語の文言も異なっている。だが後述するように、両教派ともヤンゴンやマンダレーなどの都市部では、ビルマ式で唱えるケースが多い。理由の一つは、都市部では民族を問わず、儀礼に参加するためだが、さらにパラウン内部のサブ・グループ内の言語の相違も大きい。パラウン語は、日常会話においてもサブ・グループ間で意思を疎通させるのが困難であり、グループ間の会話にはしばしばビルマ語が用いられる。そのため、多様なサブ・グループの信徒が参加する都市部の儀礼においてはビルマ式で儀礼が行われることが多く、同じサブ・グループのみ参加する場合は、教派ごとの方式で礼拝が行われる(写真6)。

II-2 パラウン仏教の担い手

次に、出家者とともにパラウンの仏教実践において重要な役割を果たす在家者の役割を紹介しておきたい。後述するように、サブ・グループごとに呼称はやや異なるが、ここではサムロン・グループの呼称を紹介する。

5) ただし後述するように、特に1990年代以降は見習僧として出家した後、すぐにミャンマー中央部へ教理学習に赴くケースが多く、ヨン文字の読み書きができない出家者も増加している。

(1) 寺院管理者ター・キョン (*ta kyɔŋ*)

ターはパラウン語で「お爺さん」、キョンはビルマ語チャウン (B: *kyaung*) に由来し、「寺院」を意味する。彼らはビルマ語ではゴーパカ (B: *gawpaka*) と呼ばれ、一寺院に数名が存在する。

(2) 在家総代ター・アチャーン (*ta ă can*)/ター・パンタカー (*ta păn tã ka*)/

プー・パン (*pu păn*)

ター・アチャーンはター・チャーンと言う人もいるが、それぞれタイ系言語で「師」を意味する *acan* から借用したものである。プー・パンのプーはシャン語で「お爺さん」、パンは「花」を意味するビルマ語パン (B: *pan*) に由来する。布施儀礼などの際に在家者の代表として仏前や僧侶の前に花を供え、誦経を先導したり出家者と在家者をつなぐ役割を果たすため、「花」という言葉が付せられており、ビルマ語ではパンダガー (B: *pan daga*) と呼ばれる。誦経に関する知識を持った還俗僧が多く、各村に2～4名ほどが存在する。

(3) 仏典朗誦専門家ター・チャレー (*ta cã re*)/ター・パットリック (*ta phât lik*)/

ター・モーリック (*ta mɔ lik*)

チャレーはビルマ語で「書記」を意味するサイエー (B: *sayei*) に由来する。パットの語源はビルマ語「読む」を意味するパツ (B: *hpat*)、リックの語源はシャン語で「文字」を意味する。モーはシャン語に由来し、熟練者を意味する。葬式、新築式、布施儀礼などの際に、在家者の求めに応じて仏典を朗誦するのが主要な任務である。農村部では各村に1名ほどいるが、いない場合は他村から儀礼の際のみ招く。ター・チャレーにも還俗僧が多いが、声が良くなければ務められない。逆に出家経験者でなくても、識字能力があり、声が良ければ務められる。

上述したミルンの記述に、布薩日に寺院境内でジャータカを朗誦する識字者の存在について触れられていたが、これはおそらくター・チャレーのことを指す。ナムサンでは、ター・シーン (*ta sin*, ターは「お爺さん」、シーンは「戒」)、ヤー・シーン (*ya sin*, ヤーは「お婆さん」) と呼ばれる老人の男女が、布薩日に寺院境内のチャロップ (*cã rɔp*) と呼ばれる寺院境内の在家用の建物で持戒して過ごす習慣が存続している。現在では、後述するように、ター・チャレーが仏典を朗誦する実践は減少しつつあるが、ター・シーン、ヤー・シーンの希望に応じて朗誦することもある。

なお、(1) と (3)、(2) と (3) を兼任するケースもしばしば見られる。

II-3 ナムサン周辺における仏教実践の現状

ではここで、上記の仏教実践の担い手が、村落においてどのように活動しているか、ナムサン周辺のヨン派とトゥダンマ派の事例を一村ずつ紹介しておきたい。なお、宗教職能者や出

家者の人数は、2013年3月の調査時点でのものである。

(1) ナムサン郡ロンダウツ村（ヨン派）

ロンダウツ村は標高約1,550メートルの山地部に位置し、周囲にシャンの村は存在しない。約240戸の住民は、テウラーイ（*Thew Rai*）というサブ・グループに属する。1980年代まではシャン語を話せる人も多く、現在でも老人はシャン語を話せるが、若い世代の多くがパラウン語とビルマ語を話す。

テウラーイ語で、在家総代はター・パンダガー、寺院管理者はター・ジョン（*ta jɔŋ*）、仏典朗誦専門家はター・タレー（*ta θā re*）と呼び、ター・パンダガーが2名、ター・ジョンが1名、ター・タレーが2名いる。ター・タレーは、葬式、初七日の際の追善供養、新築式などの際に説法する。1970年代までは、シャン文字の仏典を朗誦することが多かったが、現在では理解できない聴き手が多いため使用せず、後述するナーガテーナ師（*Nagatheina*, 1922–91年）が執筆した仏典を、独特の節回しで朗誦する。仏典は、サームロンと呼ばれるサブ・グループの言語で書かれているが、テウラーイ語と似ているため、理解することができる。

寺院には僧侶が3名、止住している。1983年に死去した前住職は、説法の際、ヨン文字の仏典を朗誦した後、パラウン語で説明していた。副住職のS師（58歳）は、ヨン文字の読み書きはできるが、意味は理解できないため、ヨン文字仏典を使用せずにパラウン語で説法する。ただし礼拝の際のみヨン派式で行う。なおパラウン文字の仏典は、在家のター・タレーが使用するのみであり、住職が朗誦することはない。

(2) ナムサン中心部（トゥダンマ派）

標高約1,600メートルのナムサン中心部に居住するパラウンは、サームロンと呼ばれるグループを中心とするが、他のサブ・グループや、ビルマ族、華人、インド系の住民も多い。パラウン語はサブ・グループごとによる言語の多様性が大きいこともあり、共通語としてビルマ語が使用されている。

ナムサンの町の中央部の小高い丘の上に、トゥダンマ派の管長寺院がある（写真7）。人口も集中しているため、寺院管理者ター・キョンは100名以上いる。在家総代ター・パンタカーは地区（*B: yat kwet*）ごとに1名の合計11名である。1950年代頃までは、葬式や雨安居期間中の布薩日、布施儀礼などの際に、仏典朗誦専門家のター・チャレーがシャン文字の仏典を朗誦しており、最初にシャン語で唱えてからシャン語の意味がわからない人のためにパラウン語で説明していたが、1970年代後半以降、管長寺院に止住するナーガテーナ師がサームロン語で執筆したパラウン文字による仏典を、パラウン独自の節回しで朗誦するケースが徐々に増加した。1990年代以降は、葬式や雨安居期間中の布薩日などにター・チャレーを招くケースは減少し、

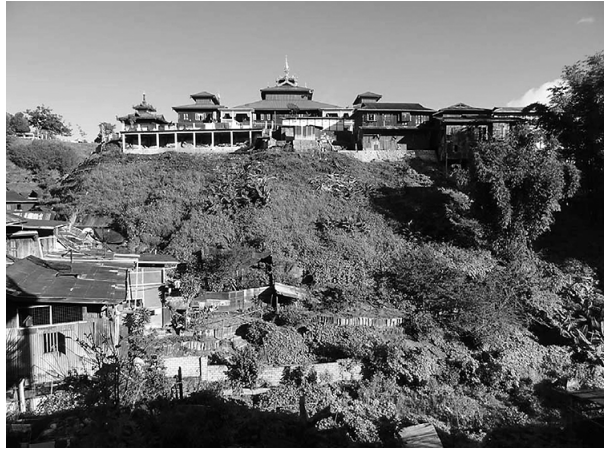


写真 7 管長寺院

現在では出家者による説法のみが行われることが多い。

管長寺院には、僧侶 12 名、見習僧 12 名、修行者 (B: *hpo thu daw* 見習僧として出家する前に、護呪経など基本的な経典を学習する子供たち) が 3 名止住している。多様な民族、サブ・グループの人々が参拝するため、儀礼で使用される言語もビルマ語である。ただし儀礼参加者がサームロンのみの場合は、サームロン語で説法を行う。その際、ナーガテーナ師が執筆した仏典を事前に読み、記憶しておくために使用する僧侶もいる。

このように、特にナムサン周辺地域では、ター・チャレーが使用する仏典が、1970 年代頃までシャン文字で書かれていたが、現在ではパラウン語でパラウン文字によって書かれた仏典を使用する村落が増加している。また特に 1990 年代以降は、そもそもター・チャレーによる仏典の朗誦が行われず、出家者のみが説法する村落も現れてきた。

では現在用いられているパラウン文字の仏典がどのように誕生したのか、またなぜ出家者のみ説法する村落が増加したのか、その経緯について次章以降で考察していきたい。

III パラウン文字の誕生

III-1 植民地時代のパラウン文字

先述したように、植民地時代の 1910 年代に調査を行い、パラウンに関する代表的な民族誌を著したミルンは、「王統記はシャン文字によって書かれていた」という記録を残したのみで、パラウン文字の存在については触れていない。しかしパラウン自身が著した近年の書物には、

1972年に大学生がパラウン文字を統一した旨の記述が共通してみられる [Paw San 1997; Muhse Myone Ta'an (Palaung) Sapei hnin Yinkyehmu Kawmati 2009; Htun Wa 2010; Thu Za Ta 2012]。以下、これらの資料とパラウン文字統一に関わった当事者への聴き取りに基づき、パラウン文字が成立した経過について、簡単に述べておこう。

最初にパラウン文字の創出を試みたのは、アメリカ人の女性 Miss Maclean である。彼女は 1912 年に、ローマ字を用いたパラウン文字を考案したが、読み書きが難しく、発音表記も不完全であったため、成功しなかった。その後、1918 年にはパラウン族のサンティリ (Hsan Thi Ri) という人物が、モン＝ビルマ文字、シャン文字にローマ字を 1 文字加えてパラウン文字を発明したが、習得する人がおらず、普及しなかった。⁶⁾ さらに 1921 年には、パラウン首長の親族であるウー・クンサンデーワー (U Hkun Hsan Dei Wa) がシャン・ヨン文字を基にしてパラウン文字を創造したが、それを使用する人はいなかった。1926 年には、シャン族のウー・ザーガラ (U Za Ga Ra パラウン首長の書記) が、シャン・ビルマ文字を基にパラウン文字を創造したが、読めるのは考案者のみで、他の一般人には教育しなかった。

この時代の現象として興味深いのは、パラウン文字を最初に考案した人物がアメリカ人であり、パラウン文字統一に関わった知識人への聴き取りによれば、彼女が宣教師だったと推測されることである。当時ミャンマーでは、キリスト教布教とともに、それまで文字を持たなかった他の少数民族の文字も宣教師によって考案されている。そうした意味では、パラウン文字創出の試みもさほど珍しい事例ではないのだが、熱心な仏教徒の多いパラウンは、山地民でありながらキリスト教への改宗者を出さなかった。それゆえ、ローマ字によるパラウン文字は普及しなかったのだと考えられる。注目すべきは、こうした「外部者」からの刺激を契機として、パラウン自身が文字の創出を開始し、さらにはシャン族をも巻き込んでパラウン文字創造の試みが続けられていくことである。

その後、文字は続々と考案されるものの、使用者がおらず不成功に終わるということを繰り返す。一方で、先述したように、当時の公文書にはシャン文字が使用されることが多かったという。その背景の一つには、パラウンの知識人ウー・ポーサンが指摘するように、シャン文字を「高レベル」とみなす一方で、自らの文化を「低レベル」とみなす風潮があった。また当時はシャン語がこの地域のリング・フランカとして通用していたため、シャン語を理解できる人も多く、あえてパラウン文字を使用する必要性がなかったのではないかと考えられる。

6) サンティリは、名前から判断すると見習僧だったのではないかと推測されるが、詳細は不明である。

III-2 ウー・ポーサンによるパラウン文字

イギリス植民地時代の 1920 年代にパラウン文字作成の動きが活発化した後、一旦、文字作成の動きは沈静化するが、ミャンマー独立後の 1950 年代に、再びその動きが活発化する。その際に重要な役割を果たしたのがウー・ポーサンである（写真 8）。以下、ウー・ポーサン自伝 [Paw San 1997] によって、その経過を述べておきたい。

ウー・ポーサンによるパラウン文字の創出は、当時のパラウン首長クンパンチンが、20 世紀のミャンマーにおける代表的なビルマ族詩人、作家であり政治指導者でもあったタキン・コードーフマイン（B: Thakin Ko Daw Hmaing 1875–1964）に、ウー・ヌ首相の紹介で会ったことを契機とする。クンパンチンは当時、有力な首長の一人で、諸民族の連邦参加を目指して開催された 1947 年のピンロン（B: Pin Lon, S: Pan Lon）会議でシャン州の代表を務めた他、独立後は国会議員を務めていた（写真 9）。クンパンチンがタキン・コードーフマインといつ、どこで会ったかについては記録が存在しないが、ウー・ポーサンに自伝を執筆するよう勧めた O 氏（男性、54 歳）は、クンパンチンは国会議員としてしばしばヤンゴンを訪れていたため、国会出席などの際に、ヤンゴンで会ったのではないかと推測する。

クンパンチンは、タキン・コードーフマインに会った際、パラウンには文字があるかと尋ねられたため、「ない」と答えたところ、「文字を持たない民族は滅びる」と言われる。タキン・コードーフマインの発言の意図については説明がないが、彼は詩人・作家として反英独立運動を指導したため、このような発言をしたのではないかと推測される。

この発言を聴いたクンパンチンは恥ずかしく思い、パラウン文字の創出を指示する。そこで



写真 8 ウー・ポーサン
出所：Paw San [1997]



写真 9 ナムサンの首長クンパンチン
出所：Min Naing [1962]

まず1954年に、ラーショーの寺院に居住していた3名のタイ国僧に依頼し、タイ国の文字を借用したパラウン文字を創出したが、パラウンにはタイ文字を知っている者がおらず、学習者の負担が大きいため、成功しなかった。

ウー・ポーサンはその話を聞き、ビルマ文字を借用してパラウン文字を作成した。ウー・ポーサンは、マンドレー、ヤンゴンでビルマ語を学び、さらにスリランカで英語を学んだ後に還俗したという経歴を持っていた。そのため、自分が文字を持たない「低レベルな」「未開の」民族の出身であることを恥ずかしく感じていたと言うのである。

筆者の聴き取りによれば、当時の出家者は、村の寺院で教育を受けることが多く、教理学習のためヤンゴンやマンドレーに赴く出家者は非常に珍しかったという。ウー・ポーサンがビルマ世界のみならずスリランカで海外の世界を経験したことは、彼の思想形成に大きな影響を及ぼしたものと考えられる。

そして1955年、ウー・ポーサンはビルマ文字を借用した上で、*va*の一文字のみを加えたパラウン文字を完成し、タアーン（パラウン）文学および文化委員会がそれを承認した。パラウンの首長だったクンパンチンは、この業績によって彼に金メダルを授与している。また2冊のパラウン文字教科書を発行するとともに、パラウンの韻文や教訓などの本を出版し、ナムサンのザヤンジー村付近の若者たちに教育を行った。

III-3 タウンジー会議

このようにして、一応の「正統」パラウン文字が選定されたが、実際には、ウー・ポーサン式にパラウン文字が統一された訳ではなかった。1950年代のほぼ同時期には、ウー・チョーハン（U Kyaw Han）が、自らの見習僧時代に習得したパオ族の文字を基にしてパラウン文字を創作している。⁷⁾

1960年代に入ると、1961年には、ウー・チョーセイン（U Kyaw Sein）がビルマ文字を借用した文字を創作している。さらにほぼ同時期には、ナムサンの管長寺院に止住していたナーガテーナ師が、シャン文字を借用したパラウン文字を考案した（写真10）。師の弟子にあたり、現在、管長寺院の副住職を務めるK師によれば、ナーガテーナ師はナムサンで出家した後、マンドレーの教学寺院で教理学習した経験を持つという。ナムサンの管長寺院へ戻った後、パラウンの韻文を学び、1961年から韻文形式の仏典を創作し始めた。その後、長らく管長寺院の副住職を務め、1980年にヤンゴンで開催された全教派合同サンガ大会議にはナムサン郡の代表として参加している。

7) トゥザータ師の修士論文は1952年 [Thu Za Ta 2012]、ウー・トゥンワーは1955年 [Htun Wa 2010]、ムーサー郡タアーン（パラウン）文学および文化委員会は1958年 [Muhse Myone Ta'an (Palaung) Sapei hnin Yinkyehmu Kawmati 2009] としており、正確な年代を特定できない。

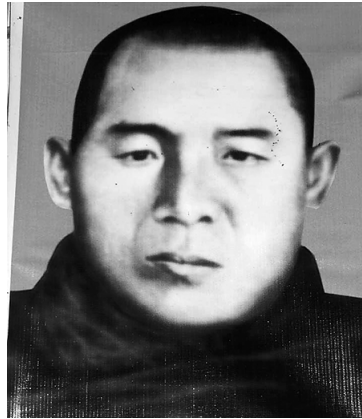


写真 10 ナーガテーナ師

出所：シャン州チャウツマー郡のパラウン寺院内に
掲示されていた肖像画を筆者撮影

当初、師はシャン文字を借用したパラウン文字を考案し、韻文を筆記していた。K 師によれば、シャン文字を使用した理由の第一は、ナーガテーナ師が管長寺院で文字を習得した際、当時は最初にシャン文字、次にビルマ文字の順序で学習したため、シャン文字を熟知していたのだろうと言う。第二の理由は、ナムサンはシャン州に属するため、シャン文字を使用すべきだと、シャン族の僧侶やシャン州指導部（B: Shanpyi Usi Ahpwe）に言われていたためだと説明する。

文献資料にも、ウー・ポーサンの自伝 [Paw San 1997: 201-218] には、シャン州指導部からシャン文字を使うよう圧力がかった旨の記載がある。またトゥザータ師の修士論文 [Thu Za Ta 2012] にも、1962 年に成立したミャンマー連邦革命評議会とシャン州指導部が、パラウン文字を統一するよう要求したとの記述が見られ、これを裏付けている。

ではなぜシャン州指導部は、パラウン文字の統一を指示したのだろうか。パラウン文字の考案者の一人でもある M 氏（男性、62 歳）によれば、シャン州指導部のうち旧シャン文字派のウー・チョーゾー（U Kyaw Zaw）が旧文字を普及させるために、パラウンに対しても旧シャン文字を使用させることを狙ったものという。ウー・ポーサン自伝にも、シャン州指導部が文字統一のためのイニシアチブを取ったことが述べられており、可能性は十分に考えられる。

ここで、旧シャン文字派が統一を狙った背景について、補足しておきたい。シャンの歴史家サイカムモンは、当時、革命評議会は、少数民族が各自の言語、文化、伝統を発展させるよう、ビルマ語と少数民族語の小学校レベルでの双語教育を目指していたのだと説明する。⁸⁾ しかし

8) この間の経緯については、高谷 [2008: 282-399] にも同様の記述が見られるが、革命評議会の意図については言及していない。

シャンの民族エリート内部で、伝統的首長ソーボワ（B: *sawbwa*）の主導により制定された新シャン文字に反対するシャン州指導部のウー・チョーゾーらと、大学生の支持する新シャン文字派に分裂していたため、1969年に文字統一を目指した会議がタウンジーで開催されている [Sai Kam Mong 2004: 328–332]。パラウン文字統一に向けての動きの背景には、こうしたミャンマー政府、シャン州指導部の政治的思惑も存在したのである。

しかし当時、シャン州各地には様々なパラウン文字が併存していた。そこでシャン州指導部は、各地の文字考案者を呼び、1965年にナムサン、1967年から1968年にかけてはタウンジーで統一パラウン文字制定のための会議を開催した。会議では、以下の6種類の原案について審議された。

- ①ウー・ポーサン：ビルマ文字借用バージョン
- ②ウー・チョーセイン：ビルマ文字借用バージョン
- ③ナーガテーナ師：シャン文字借用バージョン
- ④ナンダーサリヤ（Nan Da Sa Ri Ya）師：シャン文字借用バージョン
- ⑤ネイツカンマ（Neik Hkan Ma）師：ヨン文字借用バージョン
- ⑥ウー・タンマウン（Than Maung）：北部シャン文字借用バージョン

その結果、ビルマ文字を基本字母とし、母音記号や末子音を示す記号をビルマ文字とシャン文字から借用するように決定した。理由の第一は、パラウンは大部分が仏教徒であるため、パーリ語を伝統的なスタイルで表記できること、第二に、ビルマ文字の基本字母数が33文字で、シャン文字の19文字よりも多くの文節を表記できること [Paw San 1997: 202–218]、第三に、ビルマ文字タイプライターも使用できることであった [Thu Za Ta 2012: 163]。しかし会議後も、各地の文字考案者は、自らの文字をそのまま使用し続けたため、地域ごとの差異は縮まらなかった。上述した管長寺院のK師への聴き取りによれば、タウンジー会議の後、ナーガテーナ師も基本字母の部分をシャン文字からビルマ文字に変えたが、母音記号や末子音を示す記号はおもにシャン文字から借用し、その後もタイプライターで仏典を執筆する際に使用し続けた。

III-4 学生によるパラウン文字の「統一」

こうした多様な文字が併存する状況に対し、ヤンゴン大学、マンドレー大学、タウンジー・カレッジに在籍していた6名のパラウン大学生は、1972年にミャンマー連邦タアーン（パラウン）文学および文化中央委員会（B: *Myanma Nainngan Taan (Palaung) Sapei hnin Yinkyehmu Baho Kawmati*）を組織した。その会議に参加したメンバーの一人T氏（男性、63歳）は、学

က	ခ	ဂ	ဃ	င
စ	ဆ	ဇ	ဈ	ည
ဋ	ဌ	ဍ	ဎ	ဏ
တ	ထ	ဒ	ဓ	န
ပ	ဖ	ဗ	ဘ	မ
ယ	ရ	လ	ဝ	ဇ
သ	ဟ	ဠ	အ	

မားဘေး, စာနံဒါး: တိုင်ဘေး, ပါဠိ ကာယံး:
 ကေားအီးယိုးဟည်း:
 ယာ ဈာ ဠာ ဍာ ဎာ ဏာ ဏာ ဏာ ॥

写真 11 学生が採用したパラウン文字の基本字母

生たちがパラウン文字統一を図った理由について、①文字の相違は民族の分裂につながる恐れがあると考えたため、②シャン、モン、カチンなど他の少数民族は文字を持っているにもかかわらずパラウンにはないのが恥ずかしかったため、③文字がなければ民族も消滅してしまうという危機意識があったため、と説明する。

まずパラウンの学生らは、文字統一のための原案執筆委員会を組織した。その後、1972年にミャンマー全国各地のパラウン代表をナンカン郡パダン村に招集し、会議で原案に対する合意を得て決定された。学生が統一した文字は、基本字母にビルマ文字を借用し、ビルマ文字にない *va* の一文字を付加したという点ではウー・ポーサンの方式を踏襲している（写真 11）。しかしウー・ポーサンの表記法がそのまま採用された訳ではなく、母音や末子音を示す記号にはナーガテーナ師らによるシャン文字の表記法も採用されており、主要方式を折衷したものだった。文字の考案に関わった上述の M 氏によれば、どれか一つの方法に偏ると別のグループの反発を招く恐れがあるため、なるべく偏りのないように各文字の方式から一部ずつ採用したのだという。

この1972年版の表記法は、現在に到るまで、ナムサンやマンダレー、チャウツマー、ムーサー、ナンカンなどの地域で教育されている。ネーウィン政権が継続する1988年までは、上述したように学校でパラウン文字教育を行うことはできなかったが、寺院などで細々と教育が続けられた。ネーウィン政権が崩壊した1990年代から文字教育は徐々に本格化し、パラウン文字講座がナムサン、マンダレー、ナンカン等で毎年8月に開催されている。また1996年以降は、出家者に対してもマンダレーの寺院でパラウン文字講座が開催され、統一版パラウン文字の読み書きができる出家者も徐々に増加している。

IV パラウン仏典の創出

IV-1 ナーガテーナ師のパラウン仏典

上述したように、タウンジー会議においてナーガテーナ師が考案したシャン文字借用版パラウン文字は採用されず、学生たちもビルマ文字を基本字母とする文字を統一版として採用した。しかしナムサン周辺地域において、サームロン・グループを中心に使用されている仏典の大部分は、ナーガテーナ師が1961年から創作を開始し、特に1970年代後半以降に本格的に著したものである（写真12）。本章では、なぜナーガテーナ師の仏典が受容されたのか、という問題について考察したい。⁹⁾

ナーガテーナ師のパラウン文字仏典は、6音節を一節とする韻文（*ye-kārkāp*）形式であり、節の最初または最後で押韻する。この形式は、ナーガテーナ師の独創ではなく、パラウンの伝統的なスタイルであり、①独身男女が歌の掛け合いをする際、②結婚式や新築式などの祝祭、③葬式において死者を偲ぶ際、などには、在家信徒が朗読していた。ナーガテーナ師の独創は、そこに仏教に関する内容を含めた点である。また1961年当時、伝統的な韻文はすべて在家信徒が暗記していたが、それをパラウン文字によって記録した点も師の独創である。

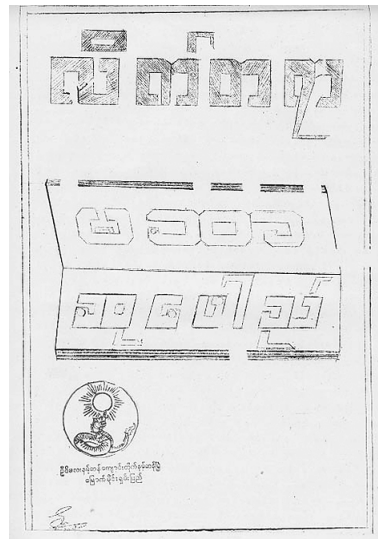


写真12 ナーガテーナ師が創作した仏典

9) パラウンの知識人ウー・トゥンワー氏によれば、ナーガテーナ師による仏典は、全部で49種類存在したが、管長寺院の火災の際に消失した仏典も多いとのことで、現在では何種類が残存するかについては不明である。

内容に関しては、シャンの言語・文字で書かれていた仏典を、パラウン語のサームロン・グループの言語に翻案している。ター・チャレーが仏典を見ながら朗誦する際には、パラウン独自の節回しで歌うように誦えられるが、出家者が朗誦する際には、仏典を見ず、また節回しをつけずに誦えられる。これは、歌うような節回しが歌舞音曲を禁じた戒に抵触するためである。

マンドレー留学からナムサンに戻ったナーガテーナ師が、なぜこのようなパラウン語の仏典を創作したのか、その理由について明言した書物は存在しない。そこでナーガテーナ師の弟子で、現在、管長寺院の副住職を務める K 師に聴き取りを行うと、1960 年代当時、シャン語の会話が可能な人は多かったが、シャン語話者でも韻文形式の仏典を聴いて理解できる人は減少していたと言う。そのため、在家信徒が説法に関心を持つよう、僧侶の側でも工夫が必要だったと説明する。

IV-2 言語環境の変化と仏教実践の変容

このようなプロセスを経て、パラウン語による仏典が創作されたのだが、次に問題になるのは、シャン語より「低レベル」とみなされていたはずのパラウン語による仏典を、パラウンの在家信徒たちはなぜ受容したのかという問題である。

この問題を考察する際に、まず注意しておきたいのは、礼拝の際の言語と、仏典朗誦の言語は異なることである。礼拝の際の文言には、おもにパーリ語と一部分に民族語が使用され、特にパーリ語の部分はほとんど意味を理解している人がおらず、礼拝する在家者も暗誦するのみである。これに対し、朗誦される仏典の内容は、聴衆も意味を理解したいと考える。仏典の内容は、ジャータカ（ブッダの前世譚）や仏伝、パラウンに茶をもたらしたとされるビルマのアラウンスィードゥー（B: Alaungsithu）王の伝記やパラウンの物語などであり、ター・チャレーによる仏典の朗誦を聴くことはパラウンの仏教実践の重要な部分をなしていたためである。

ところが、シャン語を理解できない特に若い世代の在家信徒が、特に 1980 年代以降、増加した。1970 年代以前は、シャン語がナムサンにおけるリング・フランカであり、シャン語の会話が可能な人も多かったため、シャン文字で書かれた仏典で説法しても、パラウン在家はその意味をある程度理解することができたと、パラウンの人々は説明する。

シャン語に代わり、1980 年代以降は、リング・フランカとしてビルマ語が使用されるようになった。その要因としてまず挙げられるのは、教育制度の変化である。1962 年以前のウー・ヌ政権期には、少数民族言語での学校教育も認められていたのだが、ネーウィン政権期には、学校においてビルマ語のみの教育しか認められなくなった。ただし 1983 年からナムサンの副教育長を務めた H 氏（男性、62 歳）によれば、ナムサンで学校教育が開始された 1956 年頃に

は就学率が10%程度であり、校舎もなく寺院境内の在家用施設（チャロップ）で教育を行っていたという。H氏は、教育を充実させる必要性を感じ、1984年から86年にかけての2年間でナムサンのほぼすべての村に小学校を建設させ、それまで56校だった小学校が110校に倍増、学生数も6,000名から13,000名に増加した。その際、H氏が、パラウンの反政府軍と相談し、子供を学校に通わせなければ徴兵しても良いと話をつけたことも、就学率の向上に効果があったという。その結果、1980年代にパラウンの子供たちの進学率は飛躍的に向上し、ビルマ語が日常生活でも使用されるようになった。

第二の理由は、1970年代まではシャン族がナムサンへ来て茶摘みをしていたのだが、1980年代以降、盆地における米の生産量が上がり、茶摘みに来なくなったことである。するとシャン族に代わって平地のビルマ族がナムサンへ茶摘みに来るようになり、シャン語話者が減少するとともに、リング・フランカはビルマ語に変わった。

IV-3 ビルマ仏教の影響

ビルマ語の普及という言語環境の変化は、出家行動にも影響をもたらした。老人に聴き取りを行うと、パラウンには以前、男子の出家を必須とする考え方が存在せず、また一時出家の慣行も存在しなかったと説明する。その代り一度出家したら可能な限り長期に出家生活を継続すべきとの理念が存在した。またマンドレーのナムサン寺住職（58歳）の証言によれば、ヤンゴンやマンドレーへ教理学習に赴く出家者はきわめて少数に限られていたという。その理由は、見習僧の多くはビルマ語が話せず、ビルマ語が話せなければヤンゴンやマンドレーに行っても心細かったためだと説明する。

こうした状況が大きく変化したのは、1990年代以降のことである。上述したように、特に1980年代からビルマ語会話の可能な人が増加したため、もはや見習僧たちもヤンゴンやマンドレーに出ることを怖れなくなった。その結果、ヤンゴンやマンドレーの社会福祉寺院（B: *parahita kyaung*）や僧侶教育学校（B: *hpondawgyi thin pinnyayei kyaung*）に行って勉強することを目的とする見習僧出家者が急激に増加したという。この社会福祉寺院とは、教育の困難な地域に居住する子供たちが寄宿して学校に通うための寺院であり、一方の僧侶教育学校とは、見習僧や在家の子供たちに無償で世俗教育を受けさせる寺院である。僧侶教育学校は、ウー・ヌ時代に開設され、1962年から1988年までの社会主義時代には、ネーウィン政権が宗教と一定の距離をとったため活動を停止していたが、その後に誕生した軍事政権は、仏教を積極的に支援する政策をとったため、1990年代から急激に増加した。その結果、特に経済的に貧しかった子供たちが、袈裟を着れば都会で勉強できるようになるとともに、子供たちの「目を開かせる」すなわち都市の進んだ社会について学ばせることができるため、見習僧が特に増加したのだという。彼らの中には、一定期間を寺院で過ごした後、還俗する者もいるが、勉強を終えてナム

サンの寺院に戻る僧侶も多い。

このことは、ナムサン中心部の仏教実践に意外な変化をもたらした。ナムサンの町の中心部に住む A 氏（男性、65 歳）によれば、特に 1980 年代以前は、僧侶のレベルがまだ低く、説法ができない僧侶も多かった。なぜなら、僧侶の重要な仕事は、儀礼の際に護呪経（*pa ri*, B: *pa reik*）を誦えることであり、護呪経さえ誦えてくれれば、村人たちは災難を避けられるため十分だと在家者たちも思っていたのだという。しかし僧侶たちは護呪経を暗記しているのみで、意味は知っておらず、むしろ在家のター・チャレーのほうが説法のレベルは高かった。ところが 1990 年代以降は、ヤンゴンやマンダレーで教理を学んだ僧侶が多く、説法もうまくなった。そのため、ナムサン中心部では、葬式や雨安居期間中の布薩日の際にもター・チャレーを呼ぶ人が少なくなり、僧侶が説法するのが中心になっている。

また 1990 年代以降、ナムサン中心部における葬式の際には、各村に組織された初転法輪協会（B: *Danmasetkya Ahpwe*）のメンバーが初転法輪経を朗誦することが多くなった。¹⁰⁾ 初転法輪協会は、1970 年代以降、ヤンゴンからミャンマー各地に普及したと言われるが〔小島 2014b: 249–251〕、ナムサン中心部に居住する人は、ヤンゴンやマンダレーなどミャンマー中央部を訪れることが多いため、その実践の影響を受けたのではないかと、当時の状況を知る O 氏（男性、54 歳）は推測する。ただしミャンマー国内の他地域では、葬式の際には初転法輪経を朗誦しておらず、平地のスタイルをややずらして実践しているのである。一方、雨安居期間中の布薩日には、内観（B: *wipatthana*）瞑想の師として有名なモーゴック師（B: *Mogok hsayadaw*, 1899–1962）方式の瞑想を行うター・シーン、ヤー・シーンが増加し、寺院境内の在家用施設でター・チャレーが説法するケースは以前と比べて減少している。伝統的なター・チャレーによる仏典朗誦の実践は、ナムサン周辺の村落部でのみ存続しており、ナムサンの中央部では、ビルマ族による実践の影響が強くなっていることが、近年の実践に見られる傾向である。

IV-4 「パラウン派」の創出

このように、特に 1990 年代以降、ミャンマー中央部に越境して「留学」するパラウン僧の増加にともない、初級・中級・上級レベルの教理試験に合格した後、講師試験（B: *Danmasariya*）に合格する僧侶も増加している。最初に講師試験に合格したのは、ゼーヤトゥータ（*Zei Ya Thu Ta*）師であり、現在はアメリカのラスベガスで布教活動を行っている。

またヨン派のほとんどの僧侶たちも、特に 1990 年代以降、ビルマ寺院で仏教教理を学習し、

10) 初転法輪協会とは、初転法輪経を朗誦する在家仏教徒による組織である。初転法輪経は、ブッダによる最初の説法とされる。初転法輪協会のメンバーは、雨安居期間中の満月の日などに行われる仏教儀礼に自主的に参加し、寺院で仏典を朗誦する。多くのビルマ農村や都市の地区単位で組織されているが、全国組織は存在しない。

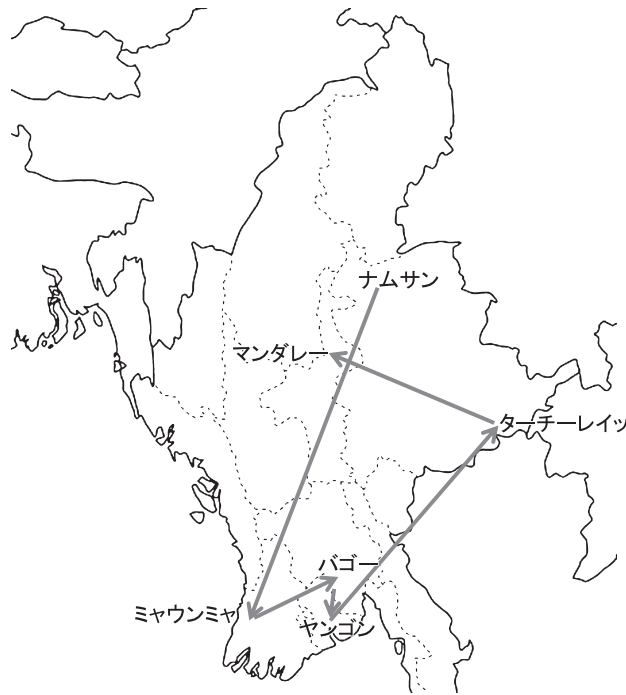


図4 トゥーカ師の移動経路

ミャンマー政府主催の教理試験を受験するようになっている。バラウン僧として2番目に講師試験に合格したのは、ヨン派のトゥーカ (Thu Hka) 師である。師は、ビルマ仏教を吸収しつつ、バラウン独自の仏教実践の構築に大きな貢献をなし、その後、2006年に還俗して現在はTNLA (Ta'ang National Liberation Army タアーン民族解放軍) の幹部として活動している。

トゥーカ師は、1967年にナムサン郡ルーカーウ (Rukhau) 村で生まれた。¹¹⁾ 7歳の時にルーカーウ寺 (ヨン派) で見習僧として出家し、ヨン文字、シャン文字と基本的な経典などを学習した後、12歳からエーヤーワディー管区ミャウンミャで教理学習し、上級まで合格した。19歳の時にバゴー管区バゴーで学習し、20歳 (1987年) の時にヤンゴンのバラウン寺院で出家した。その後、ヤンゴン市内のビルマ寺院で学習を続け、23歳の時 (1990年) に全国8位の成績で講師試験に合格した (図4)。

ちょうどその頃、バラウン文字の考案者の一人である先述のウー・ポーサンと会い、ヨン仏教について学ぶように勧められた。なぜなら、ウー・ポーサン自身はトゥダンマ派の僧侶としての出家経験を持つが、バラウン仏教の根本にはヨン派の実践が存在すると考えていたため

11) トゥーカ師の両親には息子しかいなかったため、娘が欲しいと願っていたが、やはり生まれたのは息子だったため、誕生直後にルーカーウ寺へ預けられた。寺では女性修行者が彼の世話をしたという。

ある。ウー・ポーサンは、ナムサンのヨン派は「枯れかけの木」のような状態にあるが、ヨン仏教について学び、木を生き返らせるべきだとトゥーカ師に勧めた。トゥーカ師も講師試験に合格し、教理学習が一段落していたため、ヨン文字教育の中心的な寺院の一つであるターチャーレイのナガー・フナッガウン（B: Naga Hnatgaung）寺で1年間、ヨン語を専門的に勉強した。その結果、ヨン語を理解できるようになったが、ヨン語はタイ系民族の言語であり、やはり自分自身の民族であるモン・クメール系のパラウンの仏教を発展させることが重要だと考えるようになった。¹²⁾

トゥーカ師は、1992年（25歳）にマンダレーの寺院へ移って高校卒業までの世俗教育を受け、1998年（31歳）にはマンダレーにルーカーウ・グループのためのパラウン寺院を創建した。その後、自らパラウン文字を習得するとともに僧侶によるパラウン文字教師養成講座を開催するなど、パラウン文字教育に尽力した。2006年に39歳で還俗した後も、マンダレーのルーカーウ寺院では、トゥーカ師が著したパラウン文字考案者の伝記〔Thu Hka 2009〕やパラウン教師用指導書〔Thu Hka 2011〕をパラウン語とビルマ語で発行している。

一連の行動の目的についてトゥーカ師に聞き取りを行ったところ、今までパラウン仏教はパーイ・ヨン（Pai Yōn ヨン派）とパーイ・マーン（Pai Man ビルマ派）に分かれていたが、そうした対立をやめ、パーイ・タアーン（Pai Tā'anj パラウン派）としての仏教を確立することが重要だと説く。そして、ヨン派の僧侶によるシャン州東部とのネットワーク再構築は失敗に終わる一方で、ミャンマー中央部とのつながりが強化されている。ただし、トゥーカ師らのエリート僧が、単純にビルマ仏教への模倣を目指している訳ではなく、ビルマ仏教を吸収する一方で、「パラウン派」として独自の実践の構築を目指している点に注意しなければならない。

V ナムサン周辺地域における実践の変容と持続

V-1 仏教実践の地域差

前章では、ナムサンにおけるリング・フランカの交代によってシャン語の仏典が使われなくなり、その一方でパラウンのエリート僧が「パラウン派」の創出を主張し、独自の仏教実践を構築しようとしていることについて述べた。本章では、こうした大きな傾向が、ローカルレベルの仏教実践にどのような影響を与えているか、という問題について考察する。

12) なお、トゥーカ師の後、ナガー・フナッガウン寺には、ホークェツ村出身のルーカーウの僧侶が2005年から2007年まで1名、2007年以降は師を含む4名の僧侶が派遣されたが、現在、ラオス・中国との国境付近の寺院に止住する1師（21歳）を除き、全員が還俗してしまった。というのもターチャーレイはタイ国境に直面しているため、還俗してチェンマイで仕事に就く者が多いのだと言う。そのため、ルーカーウ・グループの最長老であるアラム寺の住職も、今後は僧侶を派遣しないと述べる。このように、シャン派東部とのヨン派のネットワークを復興しようとする動きは頓挫している。

先述したように、パラウン文字は1972年に学生たちの努力によって「統一」されたというのが、タアーン（パラウン）文学および文化中央委員会による公式見解である。確かにパラウン文字の仏典使用が増加する傾向に関しては、シャン州各地で共通しているのだが、それぞれのパラウン仏典に用いられている文字は異なる。

ここで注意しておきたいのは、ナーガテーナ師は、先述したようにタウンジー会議以降、基本字母にビルマ文字を採用したが、1972年以降も学生の統一した表記法とは異なる文字で仏典を創作し続けたことである。そのためナムサンでは、タアーン（パラウン）文学および文化委員会の会員であるS氏（男性、52歳）がナーガテーナ師の仏典の「統一」されたパラウン文字への書き直しを2007年以降に行い、コンピューターで印字した後に販売している。こうした努力は続いているが、村落部で調査を行うと、ナーガテーナ師の文字によるパラウン仏典はまだ多く見られる。

また、ルーチン・グループに広く使用されているのがヨン文字を借用したパラウン文字である。学生が統一した文字とはまったく異なるが、13あると言われるパラウンのサブ・グループのうち、人口・分布地域ともに最大のルーチンは、シャン州マインカイン郡ロンザン村の寺院においてヨン文字を借用したパラウン文字の試験まで開催している。さらにその文字には地域差も見られる。

このように、1972年にパラウン文字の統一が実現したと公的には主張されるが、仏典には様々な文字が使用され続けているのである。しかしナンカン郡パダン村の会議で、各地のパラウン代表は文字の統一に同意したにもかかわらず、なぜこうした状況が生じているのだろうか。パラウン文字の現状に関して広く調査を行ったピンニャナンダ師（後述）は、ルーチン・グループの状況について、代表が会議には参加したが、その結果を地元においてきちんと説明しなかったためヨン文字借用版が存続したのだろうと推測する。確かに同じ「民族」ではあるのだが、多くのサブ・グループが存在するパラウンにとっては、民族全体としての一体感よりもむしろ、グループごとのまとまりの方が強く意識されているのである。

V-2 パラウンのサブ・グループ

ヨン文字を借用したパラウン文字を使用し続けるルーチン以外のサブ・グループは、学生が考案したパラウン文字を受容する傾向にある。しかし問題は、同じパラウン語でもサブ・グループ間には、会話が成立しないほどの相違が見られる点である。それゆえ、ナーガテーナ師の仏典はサムロン・グループの言語で書かれているが、別稿 [Kojima and Badenoch 2013] で記述したように、中国国境付近のムン・マーウ盆地に多いルーマーイ・グループは、1972年に統一された文字を使用しながら、出家者や在家の知識人がルーマーイ語によって独自の仏典を作成している（写真13）。

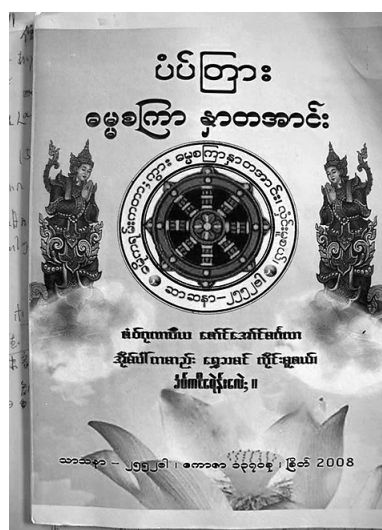


写真13 ルーマイ・グループが作成した仏典

ナムサンには、言語的差異の存在にもかかわらずナーガテーナ師の仏典を使用するサブ・グループもあったが、ルーカーウ・グループは2008年以降、サームロン語とは異なる仏典を使用し始めている。その仏典作者は、マングレー在住のピンニヤナンダ(Pinnyananda) 師(37歳)である。ここで師の経歴について簡単に説明しておこう。

ピンニャナンダ師は、1977年にナムサン郡ルーカーウ村で生まれた。小学校卒業後、15歳の時（1992年）に見習僧として出家した。その後、16歳（1993年）からエーヤーワディー管区バテインの教学寺院に9年間止住し、教理試験の初級・中級まで合格した。25歳（2002年）でエーヤーワディー管区ヒンダダーの教学寺院で上級に合格し、26歳（2003年）の時にヤンゴンのパラウン寺に移った。27歳（2004年）からは上述のトゥーカ師が創建したマングレーのルーカーウ寺院に止住しながら、36歳（2013年）でマングレーの国家仏教大学（B: Naingngandaw Pariyatti Thadana Tetkado）を卒業し、学位を取得した。トゥーカ師と同郷で彼の弟子にあたり、パラウン僧の中でもミャンマーの教理教育システムに則って学習を進めたエリート僧である。

しかし同時に、師匠にあたるトゥーカ師が組織したパラウン文字教師養成講座に出席し、2008 年からはパラウン文字教師としてマンガレー市内のパラウン寺院で文字教育に従事している。2012 年にはマンガレー・タアーン青年協会（B: Mandalei Ta'an Lungemya Ahpwe）の会長に就任し、マンガレー在住の青年僧や未婚男女のまとめ役にもなっている。

一方で、師は2008年からビルマ語やパーリ語の仏典をパラウン語に翻訳する作業を始めた。その仏典は、ナーガテーナ師と異なり、1972年に学生が統一したバージョンのパラウン文字で



写真14 サブ・グループによって異なる女性の服装
(両端がサムロン、中央左はルーチン、中央右はルーマイ)

書かれている。またナーガテーナ師はサムロン語で翻案したのに対し、ピンニャナンダ師はルーカーウ・グループに属するため、ルーカーウ語で仏典を執筆し、主にルーカーウの寺院に配布している。さらにナーガテーナ師は、パラウンの韻文に則り6音節を一節として創作したが、ピンニャナンダ師の韻文は、ビルマ語の韻文を翻訳したものであるため、原文に応じて4～6音節が一節となっている。

それまでルーカーウ・グループのター・チャレーはナーガテーナ師の仏典を使用することもあったが、村人の多くはサムロン語の意味が理解できなかったため、ター・チャレーはナーガテーナ師の仏典を朗読した後に、ルーカーウ語で説明する必要がある。これに対し、ピンニャナンダ師が創作した仏典は、ルーカーウ語で書かれており、ルーカーウ・グループの村人たちも理解しやすいため、僧侶が説法の際に暗誦して用いたり、ター・チャレーが説法の際に使用する場合もある。

ではどのようにしてサブ・グループの実践は他村落に普及するのだろうか。ここで独自性が維持されていく背景について説明しておこう。

パラウンのサブ・グループは、近年でこそグループ間の通婚が認められるようになってきたものの、以前はグループ内でしか結婚は認められなかった(写真14)。村によっては、もし他のサブ・グループと結婚した場合には、村を出なければならない掟さえ見られた。こうした親族関係によって結ばれているのみならず、入安居、中安居、出安居の1年に3回、グループ全体の母村を訪れ、僧侶や村の老人、親戚に対して礼拝する。また出安居1カ月以内に行われるカティナ衣奉獻祭では、グループの住職の中で法臘が最大の僧侶をグループ全体で訪れ、カティナ衣を奉獻する。

もちろん、ナムサン周辺の寺院に止住する僧侶は、教派を問わず毎年1回、サンガ機構の最長老を務めるトゥダンマ派の管長寺院へ挨拶に訪れるし、ヨン派の僧侶がトゥダンマ派の寺院を訪れることも日常的に見られる。だが、教派が異なれば他教派の寺院の住職にはなれない。このことは上座仏教徒社会では普遍的に見られる現象だが、パラウンに特徴的なのは、教派が同一であってもサブ・グループが異なれば住職にはなれない点である。そしてヨン派の寺院は、統一した組織を持たず、「ヨン派」という表象の水面下には、サブ・グループごとの複数のネットワークが併存しており、それぞれ独自の実践を構築しているのである。こうした特徴は「トゥダンマ派」にもあてはまるため、マングレーやヤンゴンにはサブ・グループごとの寺院が存在する。もちろんサブ・グループが異なってもパラウン僧は日常的に往来し、他のサブ・グループの寺院に宿泊することもある。しかし異なるサブ・グループの寺院に長期間滞在するのは「肩身が狭い (B: *myet hna nge de*)」という。それゆえ、各サブ・グループは、都市部においても自らの寺院を持とうと努力するのである。

V-3 サブ・グループ内の多様性

このように、パラウンの民族意識に根ざした「ヨン派・ビルマ派からパラウン派へ」という民族エリートによる表象の一方で、現実には「パラウン派」は決して一枚岩ではなく、パラウン内部のサブ・グループが、それぞれ独自の実践を築いている。しかし各サブ・グループは同様の仏教実践を共有する傾向があるものの、サブ・グループ内の村落における仏教実践が完全に一致している訳ではない。ここでは、上述した「パラウン派」の創出に僧侶が重要な役割を果たすルーカーウ・グループの事例について述べておきたい。

まずナムサンとの比較の対象として、ナムサン郡に隣接するチャウツマー郡フークエツ (Hukwet) 村の事例を挙げておこう。フークエツ村は、標高約 1,300 メートルに位置し、茶の栽培を主な生業とする。周囲にはシャン族の村も点在しており、畑作や茶の栽培に従事している。また 507 戸の住民のうち 15 戸はシャン族という環境もあり、村人のほぼ全員がシャン語での会話が可能である。

2008 年以降、フークエツ村の寺院では、村人への説法の際にピンニヤナンダ師がルーカーウ語で創作した仏典を使用する僧侶が現れた。同じサブ・グループの僧侶は日常的に出会う機会が多いため、ピンニヤナンダ師の仏典はルーカーウ・グループ内の寺院に普及している。これらの仏典はルーカーウ語で記述されているため、在家信徒にとっても意味を理解しやすいのである。

しかし説法は僧侶だけでなく、仏典朗誦の在家専門家ター・チャレーも行う。たとえば葬式当日の午前中は僧侶がパラウン語で説法し、夕食後にはター・チャレーの H 氏 (58 歳) がシャン文字の仏典を 1 時間ほど説法する。葬式の 5 日後または 7 日後には、死者のために寺院

に寄進を行うが、その際にもター・チャレーは午前中に3時間、午後3時間ほど説法する。また雨安居期間中の布薩日にター・トゥン (*ta θən*, サームロン語ではター・シーン)、ヤー・トゥン (*ya θən*, サームロン語ではヤー・シーン) から要請されれば、その場合は寺院境内のチャロップ (在家用の建物) の中で唱える。ただし現在ではモーゴック式の内観 (ウイパッサナー) 瞑想を行うことが多くなり、布薩日に招かれることはあまりなくなった。また大規模な寄進儀礼の際にも招かれ、説法することがある。村人たちは全員、シャン語を理解することができるため、シャン文字の仏典を朗読してもまったく問題ないのだという。このフークエツ村の事例は、おおよそ50歳未満の若い世代の多くがシャン語を理解できないナムサンと対照的で、両者の比較から、こうした差異を生む要因の一つは言語環境であることがわかる。

ただしナムサンにおけるルーカーウ・グループがすべて同様の条件におかれているとは限らない。ここではナムサン郡内のルーカーウ・グループに属する2カ村の事例について述べておこう。

最初に挙げるのは、ナムサン郡アラム (Aram) 村の事例である。アラム村では、葬式や寄進祭、雨安居期間中の布薩日などに、ピンニャナンダ師が創作した語の仏典を朗読する。その背景には、ター・チャレーと村長の両者が比較的若い世代に属しており、説法を、より自分たちの理解しやすいパラウン語の、さらにルーカーウ・グループの言語で聴きたいと考えたためである。

しかしルーカーウ・グループの母村であるルーカーウ村のケースは異なる。ルーカーウ村ではター・チャレーが儀礼の際にはヨン文字またはシャン文字の仏典を唱えることが多い。ヨン文字の仏典は、朗読しても村人たちはまったく理解できないため、最初にター・チャレーがヨン語のまま朗読し、ある程度誦え終わった後に、パラウン語で説明する。シャン文字の仏典は、シャン語がわかる老人であっても3分の1程度しか理解できないが、在家は黙って聴いているのだという。

ではなぜ、ルーカーウ村のター・チャレーは、ピンニャナンダ師によるパラウン (ルーカーウ) 語の仏典を朗読しないのだろうか。上述したように、ピンニャナンダ師はルーカーウ村出身で、仏典もルーカーウ語で書かれている。にもかかわらずピンニャナンダ師の仏典を使用しない理由は、ルーカーウ村のター・チャレーとター・アチャーンがともに50歳以上と比較的年齢が上の世代に属するためである。彼らは儀礼において朗読する仏典を決める際、ルーカーウ村の伝統を変えるべきではないと考えているのである。

このことは、サブ・グループ内における仏典朗読の多様性を推進するもう一つの要因が、村落内における宗教的リーダーの世代差であることを意味する。おおよそ50歳代未満の比較的若い世代に属するエリート僧は、「ヨン派、ビルマ派からパラウン派へ」と主張するが、「パラウン派」の内実も一枚岩ではなく、サブ・グループごとに、さらには村落ごとに独自の実践を

築いているのである。

こうした現状については、若手のエリート僧自身も認識しているが、彼ら自身、パラウン語による仏教実践の普及に努力する一方で、パラウン語は多様性が大きく、実践の標準化を目指すのは困難だとも感じている。シャン州各地におけるパラウンの上座仏教について視察を行った上述のピンニャナンダ師は、ルーチン・グループに属するシャン州マインカイン郡ロンザン村の寺院を訪れて驚いたという。なぜなら、ナムサンの僧侶たちがパラウン語版三蔵經典の作成の必要性を考えていた時に、ロンザン村の住職がヨン文字借用版のパラウン文字を用いて、三蔵經典をすでに翻訳している事実を発見したためである。ルーチン・グループは人口も分布面積もナムサンよりはるかに大きく、サブ・グループがそれぞれの言語による実践を発展させることに対してはピンニャナンダ師も干渉していない。

VI 結 論

VI-1 パラウンの越境と仏教実践の変容

では最後に、今まで述べてきたことをまとめよう。

本論文では、シャン文字あるいはヨン文字で書かれていた仏典が、パラウン文字の仏典へと変化するに到った経緯を、社会変容との関わりから明らかにした。最初パラウン文字を創出したのはおそらく宣教師であり、1910年代のことであった。それを契機として、パラウン自身によるパラウン文字の創出が開始されるが、当初は失敗の連続であった。パラウン文字の制定に向けての動きが本格化するのには、ナムサンの首長クンパンチンが、ビルマ族ナショナリストのタキン・コードーフマインと接触し、文字を持たないことに危機感を抱いて以降のことである。ビルマ中央部や外国の世界と接触して文字を持たない民族であることを恥ずかしく思っていたウー・ポーサンは、1955年にビルマ文字を借用したパラウン文字を考案し、それは首長によって認定された。しかしその後も、ナーガテーナ師のシャン文字バージョンを始めとする様々な文字が乱立し、パラウン文字の統一は困難だった。1972年ようやく、都市に出て教育を受ける大学生たちが中心となり、現在までナムサン、マングレー、チャウツマーなどで教育されているパラウン文字を制定する。つまりパラウン文字の成立に大きな役割を果たしたのは、「越境」を契機として平地や外国の文化と接触した人々だったのである。

こうした動きの中で、パラウン文字の考案者の一人でもあるナーガテーナ師が、1961年からは、パラウンの伝統的な韻文の形式に則った仏典を多く創作し始める。ナーガテーナ師も仏教教理を学ぶためマングレーまで「越境」した経験を持っていた。師の仏典は、特に1970年代後半以降、ター・チャレーと呼ばれる在家の仏典朗誦専門家によってパラウン独自の節回しで朗誦されるようになった。こうした新しい実践が受容された理由のひとつは、学校教育の浸

透や平地のビルマ族茶摘み労働者の流入により、シャン語からビルマ語へとリング・フランカが変化したため、特に若い世代の在家信徒がシャン語による説法を理解できなくなったことである。

ナーガテーナ師の仏典が受容されたのはトゥダンマ派が中心であったが、その後、1990年代に入ると、トゥーカ師がパラウン語とビルマ語で仏教書の執筆を開始するとともに、出家者に対するパラウン語教育を積極的に行った。師は見習僧時代から政府の教理試験を受験し、最難関の講師試験まで合格したエリート僧である。ビルマ語による教理学習が一段落すると、次にヨン語まで習得した。しかし最終的には、平地の仏教を吸収しつつも、平地の実践への単なる同化には向かわせず、パラウン独自の新たな実践を主体的に築いた。つまり「ヨン派でも、ビルマ派でもない、パラウン派」の創出を目指したのである。

ここで注意しておきたいのは、パラウン仏典を創出したナーガテーナ師、トゥーカ師ともに、パラウン仏典の創造後もビルマ仏教との強い関わりを維持しており、スコットが言うように平地の仏教に「抵抗」した訳ではないことである。逆に、リーチの議論のように、盆地のシャン族に代わって政治的実権を握った平地のビルマ族の仏教を山地民パラウンが単純に「模倣」し、文明化を目指したという訳でもない。パラウンの仏教実践の現状は、平地の仏教への「抵抗」あるいはその「模倣」といった用語で切り取れるものではなく、彼らはビルマ仏教との関わりの中でパラウン独自の実践を築こうとしている。

しかし「パラウン派」の内実には注意を要する。というのも、パラウン語はサブ・グループ間の差異が大きく、ナーガテーナ師の仏典はサームロン・グループを中心に受容されたものの、理解が困難なグループもあった。そこで2008年からはマンダレー在住のピンニャナンダ師がルーカーウ語でビルマ語仏典を翻訳し、それはルーカーウ・グループを中心に受容されている。また筆者の知る限り、シャン州に広く分布するルーチン・グループ、そして中国国境付近のルーマーイの各グループも、それぞれのグループの言語・文字で仏典を創出し、サブ・グループ内でのネットワークによって普及している。さらに同じサブ・グループ内でも、地理的条件による言語環境の相違や、村落内の世代を異にする在家仏教徒のリーダーの判断によって、差異が拡大していく。その結果、仏教儀礼におけるパラウン語の使用が増加する傾向は共通するものの、サブ・グループごとの、さらには村落ごとの実践の多様性が生じる。そしてこうした多様な実践に対し、比較的若い世代のエリート僧たちも完全な標準化までは目指していないのである。

VI-2 課題と展望

本論では上記の諸点について明らかにしてきたが、未解明の課題も多い。以下、今後の解明を目指す課題について挙げておきたい。

それは、本論でも紹介したサブ・グループの仏教実践の多様性に関してである。筆者は中国国境のルーマーイ・グループの仏教実践に関する研究から始め、ナムサン周辺地域へと調査を進めて来たが、パラウン全体で見れば、まだ全体の一部を明らかにしたに過ぎない。たとえばナムサン周辺のルーチン・グループの寺院では、雨安居期間中、寺院内の仏像前を布で覆い、中が見えないようにしてある。これは、雨安居期間中はブツダが天界で母に説法するという仏法説話に基づくものであり、この世には存在しないため雨安居明けまで仏像前の覆いを開けることを許されないのだと言う。またルーカーウ・グループでは、各戸の女性が毎朝、寺院を訪れ、仏前に供える花と僧侶に食事を届ける。ター・トゥン、ヤー・トゥンと呼ばれる老人たちは、毎朝、寺院に赴いて仏像に花を供え、僧侶から五戒を受ける。このようなサブ・グループごとに異なる実践形態の中には、上座仏教徒社会の他地域で見られないものもあり、今後のさらなる調査が必要である。

このように、パラウンの仏教徒山地民の宗教実践には、興味深い独自の歴史的・文化的・言語的な特徴が見られる。にもかかわらず、山地民仏教徒は平地—山地の二項対立モデルの「例外」であり、その実践は平地（盆地）民の模倣であるといった程度の認識しか持たれてこなかった。今後さらに検討すべきなのは、平地—山地間を「越境」する人やモノがもたらす山地民の宗教・言語・文化の動態について、政治・経済的な背景もふまえながら分析することであろう。本稿で明らかにしたように、「山地民」あるいは「仏教徒」という静態的なカテゴリーの下には、正書法をめぐる政治、在家信徒の必要に応じた仏典の創出、サブ・グループ間の言語多様性など様々なダイナミズムが隠されている。また現代においては、ミルンヤリーチが調査を行った英領期より人やモノの「越境」は飛躍的に増加している。今後、こうした現象がもたらす仏教実践の動態をさらに解明していくことにより、従来の平地—山地民関係モデルを相対化するとともに、ミャンマーの地域社会に対する認識をさらに深化させることが可能になるだろう。

謝 辞

本稿で使用したデータは、科学研究費補助金基盤研究 (A)「東南アジア大陸部における宗教の越境現象に関する研究」(研究代表者：片岡樹、課題番号 22251003, 2010～12 年度)、基盤研究 (C)「上座仏教徒社会の国家と地域の実践に関する研究——現代ミャンマーを中心に」(研究代表者：小島敬裕、課題番号 23510311, 2011～14 年度)により可能となったものである。また研究活動に際しては、日本学術振興会より特別研究員奨励費(課題番号 26・2312)の支給を受けた。さらに、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「移動と宗教実践——地域社会の動態に関する比較研究」(研究代表者：小島敬裕, 2013～14 年度)の共同研究員からも大きな刺激を受けた。ここに記して御礼申し上げる。

なお、本稿の前半部分は、共同研究の成果報告として発行したディスカッションペーパー [小島 2015]と重なる部分が多いことを付言しておく。

引 用 文 献

- Htun Wa, U. 2010. *Ta'an (Palaung) Tainyinth Hswenweichet* [タアーン (パラウン) 民族に関する協議]. Yangon: Myanma Naingnganlon hsainya Ta'an (Palaung) Sapei hnin Yinkyeihmu Baho Kawmati.
- 生駒美樹. 2014. 「茶をめぐる生産者の選択と関係——ミャンマー北東部シャン州ナムサン郡を事例として」『東南アジア研究』52(1): 82–115.
- 小島敬裕. 2009. 「現代ミャンマーにおける仏教の制度化と〈境域〉の実践」『〈境域〉の実践宗教——大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』林行夫 (編), 67–130 ページ所収. 京都: 京都大学学術出版会.
- . 2014a. 「仏教実践に見られる平地民と山地民の民族間関係——中国・ミャンマー国境地域におけるタイ族とタアーン族の事例から」『フィールドプラス』11: 8–9.
- . 2014b. 『国境と仏教実践——中国・ミャンマー境域における上座仏教徒社会の民族誌』京都: 京都大学学術出版会.
- . 2015. 「ミャンマー・シャン州ナムサン周辺地域における山地民バラウンの移動と仏教実践の動態」『移動と宗教実践——地域社会の動態に関する比較研究』(CIAS Discussion Paper No. 47) 小島敬裕 (編), 67–80 ページ所収. 京都: 京都大学地域研究統合情報センター.
- Kojima, Takahiro; and Badenoch, Nathan. 2013. From Tea to Temples and Texts: Transformation of the Interfaces of Upland-Lowland Interaction on the China-Myanmar Border. *Southeast Asian Studies* 2(1): 95–131.
- Leach, Edmund R. 1960. The Frontiers of "Burma." *Comparative Studies in Society and History* 3(1): 49–68.
- リーチ, エドモンド R. 1995. 『高地ビルマの政治体系』関本照夫 (訳). 東京: 弘文堂. (原著 Leach, Edmund R. 1954. *Political Systems of Highland Burma*. London: G. Bell & Sons Ltd.)
- Milne, Leslie. 2004 [1924]. *The Home of an Eastern Clan: A Study of the Palaungs of the Shan States*. Bangkok: White Lotus.
- Min Naing. 1962. *Meido Palaung* [母国のパラウン]. Yangon: Pyidaungzu Yinkyeihmu Wungyi Htana.
- Muhse Myone Ta'an (Palaung) Sapei hnin Yinkyeihmu Kawmati. 2009. (37) *Hnit pyi Ta'an Sapei nei Ahkan'ana hnin* (16) *Kyeinmyauk Pinnyayei Chunhsuchihmin Pwe* [タアーン文学の日 37 周年記念式典および第 16 回学力表彰式記録]. Muhse: Muhse Myone Ta'an (Palaung) Sapei hnin Yinkyeihmu Kawmati.
- Myonei Longyonyei hnin Okchokhmu Kawmati Namhsan. 1969. *Shanpyi Myaukpaing Kyakme hkayaing Nanhsan Myonei Myonei hpitsin Hmattan* [シャン州北部チャウッメー県ナムサン郡の大事記]. Nanhsan: Myonei Longyonyei hnin Okchokhmu Kawmati.
- Paw San. 1997. *Sayagyi U Paw San yi Athtupatti* [ウー・ポーサン先生の自伝]. Yangon: Momin Sapei.
- Sai Kam Mong. 2001. Buddhism and the Shans. *Myanmar Historical Research Journal* 7: 27–39.
- . 2004. *The History and Development of the Shan Scripts*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- 桑耀華 (編). 1999. 『徳昂族文化大観』昆明: 雲南民族出版社.
- スコット, ジェームズ C. 2013. 『ゾミア——脱国家の世界史』佐藤仁 (監訳). 東京: みすず書房. (原著 Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven and London: Yale University Press.)
- Scott, J. G.; and Hardiman, J. P. 1900. *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States*. Part I, Vol. 1. Rangoon: Superintendent of Government Printing Stationary.
- 高谷紀夫. 2008. 『ビルマの民族表象——文化人類学の視座から』京都: 法蔵館.
- Thu Hka, Tsau. 2009. *Ta'an Sapei Hkayi hnin Ta'an Sabyu Pokgomyado yi Athtupatti* [タアーン文字の旅とタアーン文字考案者たちの自伝].
- . 2011. *Ta'an Sapei Leilathudo yi Nipya Lannyun* [タアーン文字を学ぶ人たちへの指導書].
- Thu Za Ta, Ashin. 2012. Taungbaingnei (Nanhsan) Deitha hma Ta'aang (Palaung) Taingyindado yi Bathayei hnin Yinkyeihmu ko Leilachin [ナムサン地域のタアーン (パラウン) 族の宗教と文化に関する研究]. マンダレー国家仏教大学 (Naingngandaw Pariyatti Thadana Tetkatho, Mandalai) 修士論文.
- 王鉄志. 2007. 『徳昂族経済発展と社会変遷』北京: 民族出版社.

(2015 年 5 月 13 日 掲載決定)